

実践事例.07

多読・多聴重視の英語教育、
全員必修のプレゼン科目など
コミュニケーション教育を徹底

東京都立大田桜台高校

英語はあくまでツール。
目的はコミュニケーション

東京都立大田桜台高校はビジネス・コミュニケーション科を設置する進学型専門高校として2008年度に開校した。グローバル化が急速に進展するビジネス社会で活躍できる人材を育てていくことが同校の目標。当然のことながら、グローバル・コミュニケーション能力の育成には力を注いでいる。その重要性を民間出身の酒寄誠校長は次のように語る。

「テクノロジの発達とともに、ビジネスや人の交流に国境は関係なくなってきました。企業でも、かつては国際部門などごく一部の人が海外とのやりとりを担当していたわけですが、もはやそういう時代ではありません。より幅広い層にグローバル・コミュニケーション能力が求められるようになっていきます」

同時に、「英語はコミュニケーションのためのツールに過ぎません」と酒寄校長。最終的な目的は英語ではなくコミュニケーション

ョン。その観点から、同校では多彩かつユニークなコミュニケーション教育を実践している。

それでは、英語、国語、ビジネスの3教科、さらに学校行事における同校の取り組みを見ていこう。

使える英語の修得に
焦点を絞ったカリキュラム

英語科は、3年間で必修科目が20単位設けられており、その半数の10単位数が多読・多聴に充てられている(図1)。

「当校では、使える英語を修得することを目標としています。そのためには、頭の中ですでにたん翻訳するのではなく、英語を英語のまま理解することが必須。英語科は、その点を徹底したカリキュラムにしています(酒寄校長)

無理なく読める海外の絵本などを、細かな文法やわからない単語は気にせず、辞書を使わずに楽しみながら読む「多読」と、付属の朗読CDを同様なスタイルで聴

く「多聴」をとにかく繰り返す。

「その他の科目でも、授業の最初に、ツイッターのように、思っていることを英語の短文で書いてもらうなど、話す機会、書く機会を豊富に設けています。いずれも、正確さより流暢さを徹底して重視。細かな間違いがあっても意味が通じていれば注意はしません。試験でも同様です。文法・スペルの間違いで減点はせず、語数の多さに応じて点数を与えています(英語科/鈴木徹先生)

今までの学校における英語教育の常識を覆す内容だが、これは海外の第二言語習得理論に基づいた指導方法。GTEC、英検2級などの検定試験の結果を見ても、生徒の実力は確実に伸びているという。何より、生徒が物怖じせず、英語でコミュニケーションしようとしていることにその成果ははつきり表れている。

「ギミたちは英語ができるんだ。だから使いなさい」と生徒には話しています。それが指導の大前提です(鈴木徹先生)

国語科もコミュニケーションを意識した指導内容となっている。



校長
酒寄 誠先生



副校長
石山智典先生



英語科 主任
鈴木 徹先生



国語科
鈴木周太先生



ビジネス科 主任
藤本裕司先生

「国語の授業は座学が一般的ですが、当校では、生徒が話し、それを生徒が聞く機会を多数設け、生徒主体の授業を行っています(国語科/鈴木周太先生)

象徴的なのが、読書感想文の代わりに、本を読んだ感想を他の生徒の前で話すブックトークという試み。原稿は使わず、メモ書きを見ながら、本の内容や感動したポイントなどを伝える。その評価も先生ではなく生徒が行う。

「内容だけではなく、声の大きさやわかりやすさなども評価のポイントにしています。伝える技術のトレーニングでもあるのです(鈴木周太先生)

School Data

2008年創立/ビジネス・コミュニケーション科/生徒数589人(男子225人・女子364人)/進路状況(2012年度実績)大学56%・短大4%・専門学校20%・就職5%・浪人その他16%

取材・文/伊藤敬太郎

Communication skills

コミュニケーション能力を育む

図1 英語科の授業展開

単位数	1	2	3	4	5	6	7	8
1年次	英語I(コミュニケーション英語I)				OCI(英語表現I)			
	読	読	通常授業	通常授業	読T	聴	通常授業	
2年次	英語II(コミュニケーション英語II)				英語II(コミュニケーション英語II)			
	読	読	通常授業	通常授業	読T	聴	通常授業	通常授業
3年次	コミュニケーション英語III							
	読	読	通常授業	通常授業	通常授業			

読=図書館での多読授業 / 読T=図書館での多読授業・ALTによる読み聞かせ、グループ会話 / 聴=CALL教室での多聴授業(聴き読み、シャドーイング)

「プレゼンテーション技術」のワークシートの一部(教員用)

教師用テキスト 3年 組 番・氏名

第1章 プレゼンテーションとは

3. 今なぜプレゼンテーションか [P4-5]

①プレゼンテーションとは何か

プレゼンテーションとは、
与えられた[条件]のもとで、[自分]が持っている[情報]・[事実]・[考え]などを[相手]に[わかりやすく][正確]に伝え、受け入れてもらう行動のこと。

プレゼンテーションの成功とは、
話し手と聞き手の双方が満足できること。

【そのためのポイント】

- ① 内容の明確化
- ② 聞き手の求めるもの
- ③ わかりやすさ
- ④ 伝え方
- ⑤ マナーや態度

②考えられた条件 → 下調べが必要
聞き手… プロフィール・人数・立場・関心
時間… 考えられた時間・準備の期間
環境… 会場の大きさや設備・使用できる機器
手段… 使用できるプレゼンテーションの手段

③プレゼンテーションの種類
○[報告]…情報を伝える。
○[説明]…細かい内容を伝えて理解してもらう。
○[説明]…計画・企画・新製品などの提案を採用してもらう。

4. プレゼンテーションに必要なこと [P6-7]

①話し手と聞き手の要望の一致

★主役は「聞き手」である。

○聞き手に合わせたプレゼンテーションを行うことが必要。

1年次の7月に実施されるアメリカン・キャンプの様子。英語だけで過ごす2泊3日の合宿生活は生徒には新鮮な体験



ただし、生徒同士のコミュニケーションだけでは表現の幅が広がらないため、インプットのために重視しているのが読書。毎朝HRの時間を利用した朝読書を行っているほか、3年次には「国語の授業で週1回、小論文対策も兼ねた読書の時間を設けている。そのほか、現代文や国語表現といった科目でグループ討議などを採り入れ、根拠をもって意見を言うトレーニングをしているのも同校の国語科の特色だ。

「プレゼンテーション技術」は3年生の必修科目

ビジネス科では、2年次のキャリア教育科目「東京の経済」で全員がプレゼンテーションを経験し、3年次には「プレゼンテーション技術」で、社会に出ても通用するプレゼン技術を実践的に学ぶ。いずれも必修

の学校設定科目だ。「自分でテーマを決めて自分で考え、プレゼンする経験はグローバル・コミュニケーションで欠かせない主体性を養う効果も高いと考えています」(酒寄校長)

「プレゼンテーション技術」では、パワーポイントなどのツールについても学ぶが、それ以上に重視しているのが、話し方や論理構成、さらにアイコンタクトといったアナログなテクニックだ。

「プレゼンの基本は相手とのコミュニケーション。そのため1対1、対多を問わず、相手が何を求めているかを踏まえてわかりやすく伝える方法の修得に力を入れていきます。その前提として「主役は聞き手である」ということも徹底して指導します」(ビジネス科/藤本裕司先生)

年間の前半は個人の、後半はグループでのプレゼンに取り組み、全生徒が学年全員

の前でのプレゼンを行う。また、グループワークを通して、自分の意見をしっかりと主張しながら合意を形成していくプロセスを経験できることも大きい。

「大学に進んだ卒業生から「高校でプレゼンをやっておいてよかった」という声をよく聞きます。最近は大卒の授業もグループワークやプレゼンが多く導入されているので、その準備としても効果を挙げていると感じています」(藤本先生)

同校ではグローバル・コミュニケーション能力育成につながる学校行事も設けられている。その一つが1年次に国内の宿泊施設で実施する「アメリカン・キャンプ」。生徒数人のグループにアメリカ人の大学生や高校生のスタッフが1人付き、英語だけでコミュニケーションをしながらさまざまな活動に取り組み。

「教員はコミュニケーションの手助けはし

実践のヒント

間違ってもいいから積極的に発言するよう指導しています

Q コミュニケーションへの意欲を喚起するコツは何でしょうか？

間違いを恐れて発言しないのは日本人の悪い癖です。本校では、英語に関して、細かな文法などは間違えてもいいからとにかく話すという指導を徹底しています。同じように、英語以外での授業でもどんどん質問させています。なかにはレベルが低い質問も出てきますが、それで構わないのです。大切なのは、自分から発言する習慣をつけることです。(酒寄校長)

「自分の前半は個人の、後半はグループでのプレゼンに取り組み、全生徒が学年全員の前でのプレゼンを行う。また、グループワークを通して、自分の意見をしっかりと主張しながら合意を形成していくプロセスを経験できることも大きい。」

「大学に進んだ卒業生から「高校でプレゼンをやっておいてよかった」という声をよく聞きます。最近は大卒の授業もグループワークやプレゼンが多く導入されているので、その準備としても効果を挙げていると感じています」(藤本先生)

同校ではグローバル・コミュニケーション能力育成につながる学校行事も設けられている。その一つが1年次に国内の宿泊施設で実施する「アメリカン・キャンプ」。生徒数人のグループにアメリカ人の大学生や高校生のスタッフが1人付き、英語だけでコミュニケーションをしながらさまざまな活動に取り組み。

「教員はコミュニケーションの手助けはし